

東陽寺あれこれ

平成11年～平成30年の東陽寺の寺報より



内容

東陽寺と私	(平成十一年一号)	3
東陽寺のお宝	(平成十一年二号)	4
東陽寺の四季	(平成十二年二号)	5
東陽寺と寺町の寺	(平成十二年四号)	6
東陽寺お参り風景	(平成十三年五号)	7
東陽寺お参り風景	(平成十三年六号)	7
東陽寺生前戒名授戒した人々	(平成十四年七号)	8
東陽寺生前戒名授戒した人々	(平成十四年八号)	8
東陽寺の過去帳	(平成十五年九号)	9
大正・昭和初期時代の東陽寺あれこれ	(平成十五年十号)	10
東陽寺にある掛け軸	(平成十六年十一号)	10
東陽寺お檀家様からの質問あれこれ	(平成十六年十二号)	11
東陽寺お茶を上げる会	(平成十七年十三号)	12
東陽寺七人の侍と十六人の影武者	(平成十七年十四号)	12
東陽寺を守る仏様—— 釈迦三尊	(平成十八年十五号)	13
東陽寺を守る仏様—— 釈迦如来	(平成十八年十六号)	14
東陽寺を守る仏様—— 釈迦如来	(平成十九年十七号)	15
東陽寺を守る仏様—— 如意輪観音	(平成十九年十八号)	16
東陽寺を守る仏様—— 夢違観音	(平成二十年十九号)	17
東陽寺を守る仏様—— 大権修理菩薩・達磨大師	(平成二十年二十号)	18
平成二十年度客殿構築の様子	(平成二十一年二十一号)	19
東陽寺本堂からの発見	(平成二十一年二十二号)	22
平成二十二年度本堂改修工事の様子	(平成二十二年二十三号)	23
江戸時代の東陽寺古地図	(平成二十二年二十四号)	24

東陽寺と私

(平成十一年一号)

東陽寺は、三八八年も続いている禪寺です。開山は、勅使を賜りました大峰仏雄禪師(南翁玄舜大和尚)が、慶長十六(一六一二)年京橋の八町堀寺町に創建されました。その後、寛永十二(一六三五)年浅草高原町寺町に移転しました。

以来、江戸の多くの人々に崇拝されてきました。しかし、大正十二年九月関東震災により全焼いたしました。

そして、私の祖父二十四世円晃隆満大和尚が現在の東陽寺を昭和十三年に再興いたしました。

私は、この東陽寺に昭和二七年四月十九日に生まれ(辰年・星座お羊座・血液型A型)ました。そして父・母より引継・引継がれ東陽寺住職三十一世となりました現在四七才、妻一子(四二才)、長男朋一(十九才・大学二年)、次男慶一(十二才・中学二年)の四人家族です。趣味は、晩酌でお酒を飲みながら巨人戦を見ること。温泉につかることです。

先日長男と二人で客殿にある縄文・弥生・古墳時代の土器展示場掃除をしました土器を手に行っていると、私が小学校の頃父といっしょになつて土をほったことや、台風の翌朝晴れた日に土器探しをして腰が痛くなったことなどが鮮明に思い出され実に楽しい一日でした。土器展示物をご覧になって下さい。

また、東陽寺より歩いて五分の所に、伊興遺跡公園(入場無料)があります。時間の有る時はお参りのお帰りにでも足を運んでみてはいかがでしょうか。

合掌



東陽寺のお宝

(平成十一年二号)

前回東陽寺と私ということで、客殿の土器展示場と近所の伊興遺跡公園の紹介をしました。今回は東陽寺の宝探しをします。

まず、東陽寺の本堂を探すと、一番に目に入るのは本尊様です。

お釈迦様と普賢菩薩と文殊菩薩の三体がお祭りされています。

その右に夢違観音と如意輪観音が並んでいます。

夢違観音は左手に水瓶を持った観音様です。

次に本尊様の左位牌棚の前を見るとチベットから渡ったお釈迦様が目に入ります。

本尊様の前の棚を須彌檀と言いそのまわりを巻いているのが打引です。

須彌檀を飾っているのは、五具足(花立・火立・香炉)灯籠台です。

さらに前は、焼香台と塔婆立さらに木魚・馨子(銅版の鐘)経机・大太鼓と目につきます。

さらに目を天井に向けると天蓋(古来インドでは王侯貴人たちは大きな日傘をさして外出しました。お釈迦様もご説法をなさる時必ず誰かが傘で日陰を作りました。これが天蓋のルーツです。)

幢幡(どうばん 法を悟ったことの象徴、仏・菩薩の法門の象徴として天井から吊るしたもの)が金色に光っています。

こうして見ると私の知らないお宝がまだまだあるようです。

どうぞ東陽寺ご参詣の折は是非本堂に上がり本尊様を拝み、お宝を探してみてください。

合掌



東陽寺の四季

(平成十二年三号)

東陽寺シリーズ第3弾として東陽寺の四季についてご紹介いたします。

一年を通じて東陽寺にお参りに来ると、まず門の前の松と榎と杉がいつも青々としているのが目にはいります。そして、本堂の横を通り釈迦堂に向かうとイチヨウの木とシイの木あるのに気がつきません。そして墓地中央にどっしり構えているのが楠の木です。

春は、沈丁花、白とピンクのアセビ・白色のワビスケ・こぶし・雪柳、オダマキ・れんぎょう・桜・カイドウ、そそとして咲くオトコヨウゾメ・ドウダンツツジ・クロバナロウバイ、そして紅かなめもちの生垣が真っ赤に色づきます。

端午の節句が近づく頃、シヤクヤク・ボタン・シヤクナゲ・カラ、黄色の山吹、水色のシヤガ、紫色のアヤメ、赤色のさつきと続きます。

つゆに入りピンクや水色のアジサイ、白色のヒメシヤラ・タイサンボク、紫色のシヨウブと目を楽しませてくれます。

本格的な夏には藤色のムクゲ、オレンジ色のノウゼンカッラなど。水撒きをしているとトカゲがたくさんいるのに気づきます。

またトンボ・蝶・はち・カナブン・かまきりと多くの昆虫や爬虫類に出くわします。

その中でも夏を象徴するのがセミたちです。

ニイニイゼミ・アブラゼミ・ミンミンゼミ・ツクツクオウシと朝早くから夜まで暑さに負けずと鳴いています。すこし残念なことは、私の幼い時は、食用ガエルがガーガー煩いくらい鳴いていましたが今はほとんど聞こえなくなっていました。

秋は、お彼岸に会わせて咲く赤白の彼岸花、オレンジ色の香りの強いきんもくせい、黄色のつわぶき、色とりどりの菊。そしてホトトギスやフジバカマ。すすきに十五夜お月様、鴨や雁の鳴く声。特にこうろぎなどの虫の声が夜涼しげに鳴いています。

冬には、十二月木枯らしが吹き出すと黄色く色づいたイチヨウの葉・赤茶色の紅葉の葉がバケツに何杯も採れます。

正月を迎えると、白いかわいい、スイセン。ピンクのさざんか。赤・白の椿が咲きはじめます。

私は、時代劇が好きで、赤・白の椿を見ると、黒澤監督の映画「椿三十郎」を思い出します。

立春を迎え、白とピンクの二種類の梅が少しずつ芽を膨らませ春を感じさせます。

こうして、一年を通じて、「東陽寺の四季」を見てみると、東京にあつて、これだけの四季に触れられることに喜びを感じます。

どうぞ、皆様もご参詣の折、東陽寺を探索してみても、いかがですか。

合掌

東陽寺と寺町の寺 (平成十二年四号)

東陽寺シリーズ第4弾として東陽寺周辺のお寺巡りをご紹介いたします。

竹ノ塚百景に紹介された東陽寺は、お檀家様もご存知塩原太助・戸田茂睡・河村瑞賢等ゆかりのお寺です。

本日は近隣のお寺を中心に簡単にご紹介します。

まずは東岳寺、江戸時代浮世絵で「東海道五十三次」「大橋あたけの夕立」等 世界に名を轟かした安藤広重の墓があります。

応現寺、足立郡伊興村最古のお寺。山門・石燈籠・経塚・鉄兜出土等文化財に数多く指定されている。

易行院、「花館愛護桜」「助六縁江戸桜」等遊女揚巻との心中事件を浄瑠璃で語り、歌舞伎で有名な助六の墓が有る。

また、三遊亭円楽師匠の実家でも有る。

正安寺、与楽堂の屋根の上に、琵琶をもったおきあがり観音が目にはいる。寺町の町起こしとハワイアンコンサート・少林寺拳法等活動中。

法受寺、徳川五代將軍綱吉の御生母、桂昌院の菩提寺
また、怪談牡丹燈籠の碑などが有る。

常福寺、林家三平師匠の墓が有る。

榮壽院、太田道灌の創立で、大正天皇の御生母柳原丹似の御局の勅願所として、菊の御紋章が許されている。

連念寺、寺の山号に伊興山と言い、寺町の最西端に位置し、伊興寺町十三ヶ寺のうち一番最後に伊興で再建されたが、山号に伊興の名を採り、力を入れていく。皆さん、東陽寺の山号は萬年山です。覚えていてください。

その他、専念寺・善久寺・長安寺・浄光寺・本行寺・正樂寺がこの寺町にある。

合掌



東陽寺お参り風景 その1 (平成十二年五号)

東陽寺シリーズ第5弾 東陽寺のお参り風景としてあるお檀家様についてご紹介します。

このお檀家様は、つい一年前に最愛なる奥様を亡くし、その後今日に至るまで毎週日曜日には必ずお参りにいらつしやいます。そしていつもニコニコ笑顔で私にいうのです。

「ここに来てご本尊様を拝み、そしてお線香とお花とお水をお墓にお供えしないとどうもゆっくりと寝られません。一週間が始まらないのです。」

今日も参詣され、「昨夜は親戚の者が家に泊まり、三時間しか寝ていないので少し眠たいです。でもお参りが出来これで安心です。」と元気に話してくれました。そして、「やっと一年、喪も明けたので最近孫とボーリングを始めました。」

孫に負けたくないのです、近所のボーリング場に通っているのですよ。」と目を輝かせて話してくれました。

先日一日でどの位投げることが出来るか確かめるため、十ゲームも投げたそうです。私も家内も、十ゲームと聞きびっくりし思わず「次ぎの日からだは何処も痛くありませんか。」と聞いてしまいました。

するとお檀家様は「少しも痛くなりませんでした。それよりもその時、うっかりして会計を済ました後、サイフを落としてしまいました。」落としたのも気付かず、その夜家いるとボーリング場の人からサイフを落とされませんかと電話をもらい、はじめて落としたことに気付いたそうです。

そのサイフを出しながら「サイフの中には、一万円あったのですが、それよりも大事なものは……。」といいながら一枚の写真を見せてくれました。その写真は、亡なわれた奥様と長男さんがいっしょに写っている写真でした。そしてニコニコ笑顔で「きつと、この写真がこのサイフを守ってくれたのです……。」と大事に写真をしまわれてい

ました。
私と家内は本当に温かい気持ちになりました。

合掌

東陽寺お参り風景 その2 (平成十二年六号)

東陽寺シリーズ第6弾は、前回に続きお参り風景をご紹介します。五月十二日、真夏日を思わず暑い日でした。お墓に出て、草取りをしていると、四々五名の若い男女の方々が元氣にお参りにきました。

私もあまり見慣れない若い男女の方々なので何処にお参りするのかなと興味をもって見ていました。「xx君、お墓の場所わかる。」「もちろん、わかるよ。確か……。」とにぎやかにお参りしていました。

長男と同じような年頃だったので、私も帰りがけに声を掛けました。すると、「われわれxx先生の中学時代仲間です。今日は先生の命日で来たのです。」と元氣に答えてくれました。

お参り後、私と家内は思わず「不思議な縁だね。」と顔を見合わせました。と言うのは「彼らは、私の長男と同じ二十一歳。もう先生が亡くなられて七年になるのに、すっかり命日を覚えています。しかも、亡くなられた先生というのには、私の父と同じ五月十二日が命日なのです。」さらにびっくりすることは、「私の父が中学教師をしている時の教え子が、この亡くなられた先生の奥さんなのです。」何故か。見えぬ糸に、父と教え子。さらにこの若い教え子がこうしてお参り来ていると言う現実には、何とも不思議な縁を思わずにいられません。この「縁」と言う言葉を、今回ほどじっくりと考えさせられた事はありませんでした。

最後に一言。この場をかりいっつも父の墓にお花をありがとうございます。

合掌

東陽寺生前戒名授戒した人々（平成十四年七号）

東陽寺シリーズ第7弾として私が生前戒名を授戒したお檀家様の声をご紹介します。

ひと雨ごとに秋も深まり木洩日の下石路が

ひっそり咲いております。

つたない感想文です。テレビである女優さんがご夫婦で戒名を頂いた。理由はあちらに行つた折知らない名がついていたら会えなくなるからと言っております。私達も寿陵をした以上漠然とは考えてはいたので、その言葉に感銘を受けたものの、どうしたら良いか解らず：ところが何かの折にご住職に相談しましたところ「生前に頂くことは最良」と言われ決心した次第です。夫婦共々希望の一字が入りました。戒名を平成十一年秋に頂き（結婚記念日）「今日から仏の子」と言われましてから、毎日がすがすがしく生活が出来、我欲も薄らぎ気持ちに余裕が出来穏かな心で人に接するようになり、現在では少しでも役に立てばと夫婦で各々のボランティア活動に精を出しております。

生前戒名授与を慶び

略

御棚経当日、方丈様にお願ひ致しました。私も卍禪子方丈様より戒名を頂いておりますので、早速十月三日娘の祥月命日に伺い厳肅の内に授戒の式を受けることになりました。お話によりますと、「そもそも授戒と言うことは一言で言えば宰朋方丈様の弟子にして頂くことを通してお釈迦様の弟子、仏弟子に加えて頂くことで之に伴い守らねばならぬいましめやきまりを生きる喜びにすることである」と伺いました。儀式は宰朋方丈様の式の順序のお話があり、読経に始まりました。特に印象に残りましたのは、先づ観音様ほかの方々と儀式を行う、天蓋の中にお迎えするため本人の頭の上から四方に洒水を撒き、剃髪型の

でカミソリを頭髪に当てる。本人は方丈様の前に膝を付き、弟子になつてからの教えを方丈様のあとに続いて唱和し、御本尊に読経中焼香し逐次御教え通りに進行し、終りに戒名と輪袈裟を頂きました。幾分上気し歓喜にみちた安らかな様でした。そろそろ平均寿命越え、余命に関心が深まり先々に思いを致すとき同じ仏弟子に列することが出来ました。家内は「私の戒名の中には娘と主人の戒名の中から一字づつ入っていますから彼岸に行つても迷いなく再会出来又三人で揃つて楽しい家庭を作り今まで以上の幸せが得られる」「猶一層その御教えを守り努めたい」と心にきめ安心立命を得た様でございます。すがすがしい儀式でした。ありがとうございました。

合掌

東陽寺生前戒名授戒した人々その2（平成十四年八号）

前回に引き続き生前戒名を授戒したお檀家様の声をご紹介します。お便りの生前戒名を頂いた感想をとの事ですが、アノ時の帰り道娘たちがとても綺麗なお戒名なのでお母さんらしくないとカラカワレましたが、自分では喜んでおります。

又一人になりました時に、夫の位牌をみまして隣に並ぶ自分のお戒名を思いうかべて、一言話しかけたい気持ちになりました。生前戒名を頂くという事はとても心やさしくなるものと、しみじみ思います。

信仰に生きる証しとして夫婦で生前の受戒にあずかり、最上の慶びである。

人生の節目に解脱し、法名に恥じないよう更に精進し、力まず精一杯今を生きたい。

夫婦で身に余る戒名を頂き夫との冥土での再会を心配もなく、余生を暮していけることに感謝しております。

合掌

衆生仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入る位

大覚に同うし已る、真に是れ諸仏の子なり

東陽寺の過去帳

(平成十五年九号)

東陽寺シリーズ第9弾として東陽寺の本尊様と並び最も大切なお宝である過去帳についてご紹介いたします。

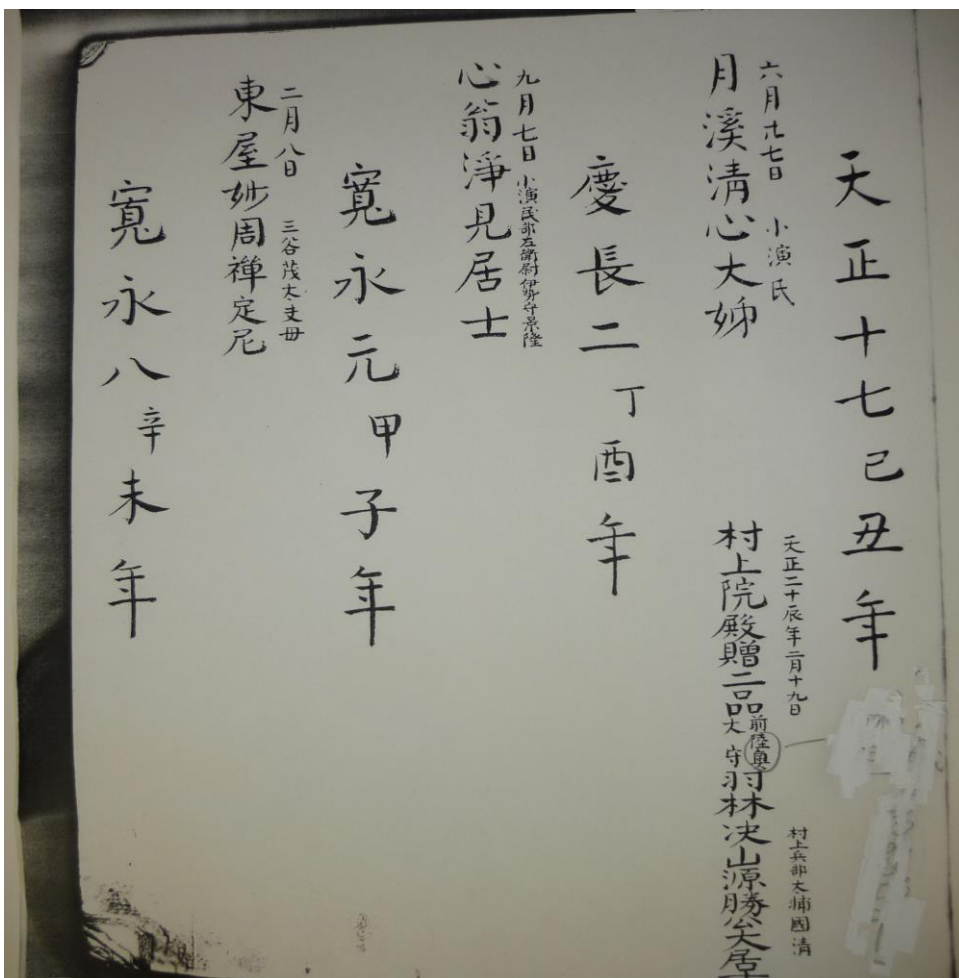
東陽寺の過去帳は、現在九冊あります。その一番古い過去帳の書き出しを見ると「古来靈簿之設多以係為例他今此簿特以係年也。欲是使其先亡易知年代遠近也一披卷而泝其年則若干靈忌昭々干目前豈不追尋捷徑哉」即庵派下総国葛飾郡関宿山王 六国峯東昌寺末武州豊島郡江戸浅草八軒寺町萬年山東陽寺 慶長十六年(一六一一年)辛亥八月二十四日八町掘仁而拝領仕候 御奉行 米津勘兵衛殿、嶋田治兵衛殿、御地割 木原勘右衛門殿寛永十二年(一七九七年)乙亥(きのとい)五月二十二日替地拝領仕引越申候、御奉行朝比奈源六殿 表口式拾間式尺 駒井治郎左右門殿 裏江三十二間 黒川八左衛門殿」と書かれています。

前書きと東陽寺の本寺との関係、江戸京橋八町掘に創建され、拝領替えにて江戸浅草高原町に移転したこと等がわかる。また、テレビ時代劇で御なじみの御奉行朝比奈殿が関係している事などがわかる。さらに過去帳を読むと、東陽寺開山の勅特賜大峰仏雄禅師南翁玄舜大和尚をはじめ、歴代大和尚の戒名と没年が記されている。さらにお檀家様のトツプを切つて天正十七己丑年(一五九〇年室町幕府亡び戦国時代)小演氏 続いて天正二十年辰 村上院殿贈二品前陸大守羽林決山源勝公大居士 村上兵部太浦国清と有り、慶長十六年(一六一一年徳川家康の時代)東陽寺創の施主として院殿号を授与している。寛永十二年一六三五年徳川三代將軍家光の時代)に浅草に拝領替えの時、過去帳檀家トツプにある小演氏に対し、村上氏と同様に創建の施主として川福院殿白翁浄龍居士という院殿号を授与している。その他院殿号を授与しているのは、寛文十二年(一六七二年)井伊氏、大勝院殿日頼春畧大居士と亨和二年(一八〇二年)小野半左エ門とその奥方、玄功院殿智徹道運居士・荷香院殿浄室千葉大姉(この石塔は現在水屋の横に有る)に院殿号を授与している。

東陽寺で有名な塩原太助は、文化十三年(一八一六年)鹽原壽算居士。河村瑞賢は、元禄十二年(一六九九年)英政院傳等瑞賢居士。と過

去帳に夫々載っている。現在の過去帳と照らし私の推測からですが(間違え等ありましたらお許し下さい。ご一報下さい。)江戸時代からつづいているお檀家様は、塩原様・河村様・山岡様・日向野様・東山様・天野様・井上様・渡邊様・高田様・宮野様・西宮様・石屋様・中村様・福岡様 等、です。以上過去帳から東陽寺の歴史の一部を紹介させて頂きました。

合掌



大正・昭和初期時代の東陽寺あれこれ(平成十五年十号)

東陽寺シリーズ第十弾として東陽寺の昔についてお檀家様からお話を聞きましたのでご紹介します。

「母から聞いた事です。竹ノ塚にお寺が移転の時(昭和三年)浅草のお寺のお墓からおかさんを掘出して焼いたそうです。」

その時、母が立ち会ったそうで、今思えば誠に残念だったと申して居りました。おかんは、黒塗りの漆器で中に木炭が敷き詰めてあり、朱で封印してあったそうで、その頃は何も知らなかったのです、ただただぼうと見ていただけだった。今だったら写真位は写したのだけど、何もかも焼いてしまっただけで、大切な物を無くしてしまった。」と話してくれました。

また、あるお檀家様は、「関東大震災の時は、小学校だった。何階建ての建物が壊れ道路が大きくひび割れました。当時は浅草の寺に行かなかったので浅草のお寺はわからない。でも竹ノ塚に移ってからは、お寺に良く行ったので覚えている。竹ノ塚の駅から本堂が他の寺より高く良く見えた。駅からお寺までの道は、田んぼでイナゴがたくさん取れた。当時お墓を百五十円で建てた。確かその時、まわりの土地が坪五十円で買わないかと言われたこともあった。当時お寺でたくさん鶯をかっていた。元旦に鶯の声をNHKが流すのに、東陽寺の鶯を録音した……。」と懐かしそうに話してくれました。

あるお檀家様は、「浅草時代東陽寺の様子を親父から聞いたはなしは、確か大きな納骨堂があったこと、現在本堂の横にある石塔が当時のものだと思う。竹ノ塚に移転してから思い出す事は、当時竹ノ塚周辺は沼地で、東武線は単線で駅は沼の中に石だけが立っていた寂しい所であった。カエルがとにかくたくさんいた。先代の卍禪子和尚は、鶯に日本舞踊・日本画と思い出す。……。」と話してくれました。

「関東大震災の時は、生まれて一才。浅草のお寺のことはなにもわからない。戦争で家を焼き昔の書類も無くなってしまった。寺も私も疎開した。竹ノ塚のお寺の思い出は、草加せんべいをいつももらったこと、駅からお寺までイナゴやトンボのびるを良くとったこ

と。お昼は上野の井泉でトンカツを食べたこと。お寺参りが本当に楽しみだった。」以上昔の東陽寺あれこれですがこの他になにかありましたら一報をお願いします。合掌

東陽寺にある掛け軸 (平成十六年十一号)

東陽寺シリーズ第十一弾として東陽寺にある掛け軸に書かれている意味をご紹介します。

まず、客殿真中の床の間にある掛け軸には、永平寺貫主七十七世丹羽兼芳禅師の毛筆で

「月二みか瑩たがえ雲二耕シテ」と書かれています。これは、道元禅師「山居」という頌の一部です。

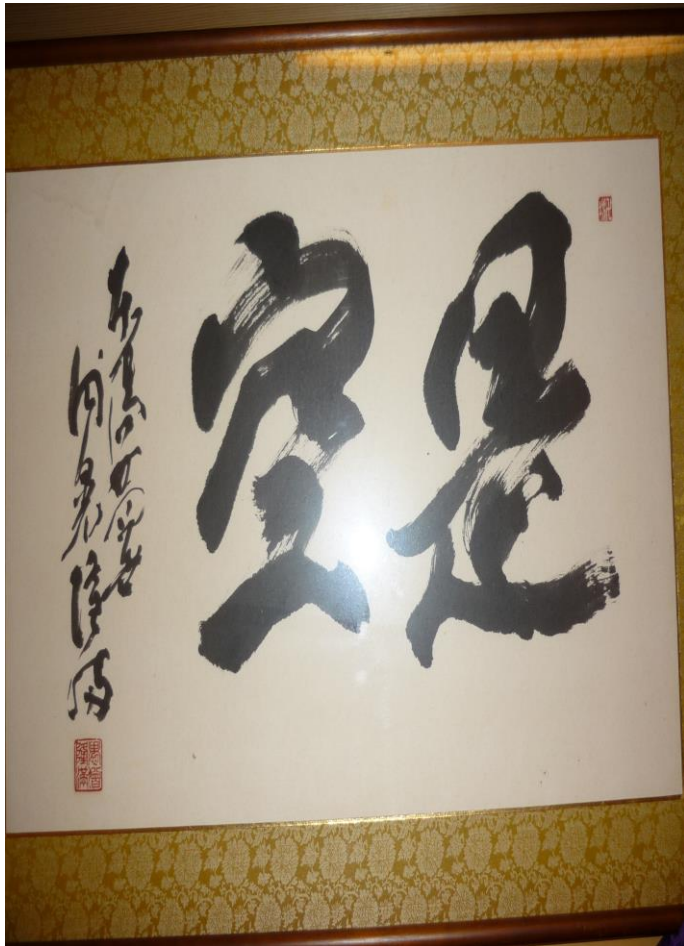
全文は「西来祖道我東伝 釣月耕雲耕慕古風 世俗紅塵飛不到 深山雪夜草庵中」 西来の祖道、我東に伝う。月を釣り、雲を耕して古風を慕う。世俗の紅塵、飛んで到らず。深山雪夜、草庵の中。インドの達磨大師によって伝えられた禅の真髓を、私は日本に伝える。天中の月を釣り、雲の畑をたがやすごとく実体のないものたとえに禅の修行を表現し、今私は修行に励み古風に慕う。ここには、世俗の塵などはまったく飛んでこない。いま私は、深山の雪の夜の草庵の中で坐禅をしている。の一句です。

次に客殿の奥に掛けてある拓本の詩は、楓橋夜泊ふうきょうやはくと言う、唐の詩人、張継ちやうけいの作品です。「月落ち鳥啼からすないて霜天に満つ 江楓魚火愁眠こうふうぎょかしゆうみんに對す

姑蘇城外寒山寺夜半の鐘声客船に到る」

月は落ち、鳥がなき、冷たい霜の気配が天空に満ち溢れている。旅愁に眠れぬ眼を窓の外に向けると、川岸の楓に漁り火の映えているのが見える。姑蘇城外にある寒山寺の夜半の時を知らせる鐘の音が、この旅の船にまできこえてくる。という旅愁を歌った詩。客殿中央の床の間にある掛け軸には、

「得失常存 唇舌間人争 名利死生 間樂中有苦 中樂禍福 回轉一



髪問」 香両子 とあります。さらに本堂に入る入口の上に祖父の卍禪子和尚の自筆で「是空」とあります。これは、般若心経の「色即是空空即是色」という言葉の一節です。これはお釈迦様の教えを「空」と言うことで示しています。「現実世界は実体がなく、実体が無いからそこに形がある。」と言っています。現実の形は一時的に存在し不変のものはない。(諸行無常)また、あらゆるものは、多くの物が集り形成され、有る条件によって変化する。条件が異なると結果も異なる。(諸法無我)このコントロールできない、有でもなく、無でもなく、有であり、無でもあると混沌とした状況を「空」といいます。

合掌

東陽寺お檀家様からの質問あれこれ

(平成十六年十二月)

東陽寺シリーズ第十二弾として東陽寺のお檀家様から受けた質問に答えを紹介したいと思ひ書き出しましたが、質問と答えがたくさんあり書くスペースがたりません。そこで今回は、私が施食会で法話する予定になっていたこともあり、その多くの質問に、輪廻と修証義の解釈を織り交ぜて答えることとし、寺報東陽寺シリーズ第十二弾は法話のブログとして質問のみを列挙します。

なんと言っても質問の多いのは、身内に不幸が起きた時です。まず、経験がなく、普段はあまり死の事も漠然としか考えていないため、どうしたらよいか悩むからだと思ひます。

そこで最初の質問は、突然身内の方が亡くなられた時どう対応したら良いかです。またその時、神棚・仏壇をどうするのか。そして葬式はどうするか。この時お寺とトラブルケース事例。さらに葬式が終わり、仏壇をどうするか。仏壇については、仏壇の向き、位牌の並べ方・朝のお勤めで、お経は何を読んだら良いか。そして最愛の亡き故人を思い毎月月命日に寺にお参りをするようになる、いろいろな事に気づきます。桶を置きたいのですが。何時までお寺が開いているのですか。十六羅漢とは何ですか。お寺にある位牌段にあるお位牌は何ですか。焼香の回数は何回か等、さまざまな質問がとんできます。そして、初めて新盆を向える時期になると、棚経は、新盆はどうお迎えしたら良いか。

さらに、一周忌・三回忌と年回忌が来ると、当日持つて行くものは、年回忌が重なった時は等……。

また、仏壇のお位牌が一杯になったらどうしたら良いか。仏壇の本尊様は、お釈迦様でなく観音様が良いのか。

仏壇を移動したい。遺骨を分骨したい。……等数々の質問があります。

どうぞ、大施食会の法話でその答えの一部をお話しますので、時間の許す限り大施食会参加をお願い申し上げます。

合掌

東陽寺お茶を上げる会 (平成十七年十三号)

東陽寺シリーズ第十三弾として私が住職になって始めたお茶を上げる会についてご紹介します。

そもそもこの会を始めるきっかけは本堂の両サイドにある位牌檀を初めて掃除した時、位牌とお茶碗がバラバラでどうすることもできず困り悩んだ末、各お檀家さんに見てもらおうと思いはじめました。今回で十二回目になります。

毎年四月と十一月の第三か第四の土曜日、午後二時から三時半に行っています。この会は年二回、会費千円で「細く・長く・ゆっくり」を、合い言葉に皆様と一緒に先祖様にお茶を上げお菓子を食べお檀家様同志交流を深める事を目的に開催しています。この会の内容をもう少し説明すると次の差定（法要等の式進行を示す表）によって進めています。

- 一、導師上殿 一、上香 一、本尊様へ献茶湯
- 一、般若心経 一、回向 一、各自位牌へ献茶
- 一、拈香法語 一、先祖供養・修証義 一、回向
- 一、椅子に坐ったまま五分間坐禅
- 一、客殿にて茶話会
- 一、墓参り

以上

上記差定の通り本尊様とご先祖様にお茶を上げることが中心ですが、先祖供養の為に参加者全員で読経もあります。読経では、般若心経・修証義と空で読める人も数名いらっしゃり本当に感心します。特に坐禅は、足を組むわけではなく椅子の下に足を置き正座し、背筋をのばし、呼吸を整えリラククスすることに重点を置き気楽に行っています。そして本堂の空気を感じ取ってもらっています。

昨年十一月の時は、特別イベントとして元気の良い方々に須彌檀に上がってもらい、ご本尊様を真近くに拝観することも行いました。客殿での茶話会は、もっぱらお菓子を食べる事が中心ですが、全員

に必ず自己紹介をして頂いています。また時間によってはビデオを見たり、お寺の近況をはなしたり、雑談をしたりしています。そして最後にお墓参りをして解散するという会です。

位牌檀に自分の家のお位牌が置いていない方でも、全員がこの会には参加できます。というのは、位牌檀には當山檀信徒各家先祖代々諸精霊位のお位牌があるからです。参加されたい方はお気軽にお問い合わせ下さい。

合掌

東陽寺七人の侍と十六人の影武者 (平成十七年十四号)

東陽寺シリーズ第十四弾として東陽寺を守る七人の侍と十六人の影武者を紹介します。(私住職は黒澤監督ファンで特に七人の侍が好きで今回こんなタイトルをつけました。)

七人の侍の頭は、私住職です。作務に汗を流し感謝する毎日です。七人の侍ナンバー2は、大黒様である家内です。文字通り家事全般とお寺に目を配ります。申年で、器用で、仕事は人一倍早くこなします。次に七人の侍三番目は、長男朋一です。見かけは線が細く見えますが、以外と頑固でまげずきらい、知的なスルドサもあり、現在社会の波にもまれお寺の責任者となるための修行中。七人の侍四番目は、次男慶一です。性格はおとなしくやさしいやんちゃ者。一徹で一旦へそをまげるととことん頑固の牛年。現在大学一年生。

七人の侍五番目は、長老お寺の責任役員でもあり檀家総代長野様。浅草時代からお父様を筆頭にお兄様と三代総代を務め、お寺のことにつき智慧袋的存在。七人の侍六番目は、若き総代兼責任役員の藤田様。私の父天通影地和尚が中学教師時代の教え子。神田飲食業社長。大学は法科卒で、私と年が近いので良き相談相手。七人の侍七番目は寺の責任役員である黒川様。元建築会社社長の豪腕をいかんなく発揮。ゴルフ・毎日十キロ散歩と大藪老師推奨のリブレ(玄米の粉)を愛用し、健康に留意しているそうです。

次に十六名の影武者の紹介です。影武者一番から八番まではお寺の報恩会や施食会等の行事を支えるお坊さん方です。

私の師匠で、お経・習字にかけては天下一品の安養寺住職本宮老師。実感こもったお話上手な雲谷寺住職／副住職上田老師親子。豊川稲荷に勤め多くのお坊さんを率いている隆昌寺住職内田老師。豊川稲荷での客接待をしきる源昌寺住職浅井老師。私の従姉妹で声の澄んだ維那和尚の昌福寺住職田中老師親子と長男の良き兄貴分で昌福寺副住職萩野座元の以上八名がいつもお寺の行事を支えています。

影武者九番目はお寺の何でも相談役の顧問弁護士安藤先生。影武者十番目と十一番目はお寺の会計をすべて見ている飯島会計事務所の飯島先生・蓮沼先生。影武者十二番目から十四番目は、報恩会・施食会で裏方において、気を使っている姉・従姉妹のさき子さん親子。最後の影武者十五・十六番目は柴田石材店と元井石材店の二社です。以上七人の侍と影武者十六人です。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

合掌

東陽寺を守る仏様——釈迦三尊 (平成十八年十五号)

東陽寺シリーズ第十五弾として東陽寺をお守りする仏様について数回にわたりご紹介いたします。

今回は第一回目としてお寺のご本尊様である釈迦三尊に焦点をあてて仏像の特徴・見分け方・そこにまつわる話をします。

釈迦三尊の中心はもちろんお釈迦様がいらつしやう、向って右側に普賢菩薩・左側に文殊菩薩がお釈迦様をお守りしています。

初めにお釈迦様の特徴をお話します。お釈迦様は、如来様で普賢菩薩・文殊菩薩等の菩薩様と大きく違う特徴は髪型に有ります。菩薩様の髪型は髪が長いのに対し、如来様はラホツツと言ひ小さい巻貝のような髪の毛が巻いています。また、お釈迦様の特徴に手の組み方があります。

お釈迦様が悟りを開く前に煩惱の誘惑を断ち切る組手として降魔印。教えを説いた時の説法印。救いの象徴の与願印・施無畏印。沈黙の象徴である禅定印の五種類が手の組み方の基本です。東陽寺の釈迦三尊は沈黙の禅定印です。足は坐禅を組んでいます。そして光背があります。

では、次に脇侍の文殊菩薩についてお話します。

文殊菩薩は「三人寄れば文殊の智慧」と言う言葉があるように智慧と戒律を司るところより学業成就の仏様として信仰されています。特に禅宗の坐禅堂では聖僧と呼ばれる僧形の菩薩像、即ち文殊菩薩を安置しています。姿は長い髪の毛

冠を飾り右手に剣を持ち、左手に経典あるいは青蓮あるいは如意(法会に使う法具)を持ち、坐禅しています。東陽寺の文殊菩薩は手に何か持っていたのですが現在なくなってしまいい何を持っていたかわかりません。

次に脇侍の普賢菩薩ですが、普賢菩薩は本々女性だったが、成仏して男性になったと言われています。文殊菩薩が智慧と戒律を司るのに対し普賢菩薩は、慈悲と修行を代表する菩薩です。姿は長い髪に宝冠を被り合掌し、白い象に乗っているのが一般的ですが、東陽寺の普賢菩薩は蓮華座に坐禅しています。

ここで少し文殊菩薩と維摩(ゆいま)居士の面白い問答を碧巖録(八四則維摩不二法門)からご紹介いたします。不二法門とは相對差別の世界を離れ、絶對平等の世界へ悟り入った境地の事で、「この境地について」文殊菩薩は「我が意の如きは、一切の法において無言無説、無示無識」と般若心經の空の教えを言葉にして答えたのに対し、維摩は一言も発せず。『維摩の一黙』。まさに維摩は空を實踐して示したと賞賛されました。この不二法門の境地をもう少し平易の言葉で言え、心をわすれ 無_二空 とすることだと私は思っていますが、毎日のお勤めに無我夢中に過ごす今日この頃です。

合掌



普賢菩薩

釈迦如来

文殊菩薩

享和三年（1803年）再興 十三世 鐵心石梁大和尚 施主 鳥居六郎右ヱ門

東陽寺を守る仏様——釈迦如来（平成十八年十六号）

東陽寺をお守りする仏様として前回釈迦三尊に続き、今回は本堂正面左手に安置されているインドから渡ってきたと言われている釈迦如来像とその後ろにある位牌檀右隅にある釈迦誕生仏（お釈迦様の誕生した時の像・大きさ十数センチ）に焦点をあててお話しします。

今回は、釈迦三尊のお釈迦様について、髪型・手の組み方について紹介しましたがその他の特徴についてインドから渡ってきたお釈迦様から補足したいと思います。まず頭の形は肉髻（にくけい）という相があり、てっぺんの肉がもりあがっています。これは、如来様の智慧の偉大さを表しています。顔については、日本での作成のお釈迦様は肉がふっくらして穏な目をしていますが、インドのお釈迦様は少し痩せ方で目は大きいです。眉間に白毫（びやくごう）という円形の突起があり、これは如来と菩薩だけのもので、一本の白い毛が右巻きに生えて、のびると四・九五メートルにもなります。この白毫は智慧や慈悲による導きの光を象徴しています。また、耳は長く伸びた耳たぶを持ち、人々を救う為、世間の理を感知して、世間の声を良く聞かためといえます。また、このお釈迦様の手の組み方は人指し指を立て中指から小指をかまます印——隆三世印（ごうさんぜいん）は、仏教を敵対する魔を退治する姿を表現しています。

また、お釈迦様の足の裏にはおもしろい特徴があります。如来様の足の尊さを意味する七種類の相を表し、瑞祥七相と言われ魚や法輪・矢・月を描いています。この足の裏だけを石に線彫りしたものを仏足石と言います。如来像を拝むのと同じ功德があるとされています。インドでは仏像が作られる前からこの仏足石を礼拝していました。

次に小さなお釈迦様の誕生仏についてお話しします。皆さんもよく知っている花祭り（四月八日——降誕会・灌仏会）に柄杓で甘茶をかけてあげられるお釈迦様の像です。右手を高く揚げ、左手は真直ぐ下・地を指し、生まれてすぐ七歩歩き「天上天下唯我独尊」と言われたといえます。この甘茶をかけるのは、竜が天からやってきて香湯を注いだという話から行うようになったそうです。また、「天上天下唯我独尊」というのは、人はみんな生まれながらにしてかけがえのない尊い生命をも



インドから渡って来た 釈迦如来像

つているということをお釈迦様は示したのです。

この「天上天下唯我独尊」にはこんな話（碧巖録五七則―趙州至道無難）があります。ある僧が禅の道は何かと趙州禪師に聞く。「至道は難きこと無し、ただえり好みを嫌う」「では選り好みをしないと、どういうことか」「天上天下唯我独尊」すべての人間は仏と同じ平等で仏心を持つと答えられました。

どうぞ、今度の参詣の折には二つのお釈迦様をお参りして下さい。

合掌

東陽寺を守る仏様―釈迦如来その3 (平成十九年十七号)

東陽寺をお守りする仏様として二回にわたりお釈迦様についてお話しました。そこで今回は、お釈迦様が鎮座している釈迦堂そのものに焦点をあててご紹介します。

本堂の横、お墓の入り口にある釈迦堂は、平成二年二十九世天通和尚(父)並び前任職(母)が、将来を見越し、家族の少子化・後継ぎの不足等考え、以前あった関東大震災慰霊塔を改築し、台座に戒名等書ける板碑プレートを設置した近代永代供養墓として建てました。

この釈迦堂の台座に戒名等を書ける構造は、平成四年に特許庁長官から実用考案を受けたもので、最近墓地不足から永代供養墓が人気を受けている様ですが、十七年前から東陽寺では永代供養釈迦堂があったのです。釈迦堂の構造をもう少し説明すると、台座の上に一・5メートルの石のお釈迦様が坐禅しています。釈迦堂の中は、人が少しかがんで歩ける広さがあり、正面と左右にお遺骨を安置する棚があります。中央に合祀用(五十回忌過ぎて仏様は土に戻ると言う事でお遺骨を撒く)穴があります。現在釈迦堂には三十家の御遺骨を預かっていますが、この中に以前は東陽寺のお墓を持っていたお檀家様が、後の後継者がいらつしやらなくなり、釈迦堂に移られた方もいらつしやいます。

近年少子化が進み、残念ながらお墓を見守る後継者がなく無縁墓になる事が話題になる昨今ですが、東陽寺には釈迦堂という永代供養墓があり、お釈迦様が見守り、土に戻る五十回忌までお寺が責任を持って見るという形態があります。

最近、私もお墓の多様化・少子化に伴う世の中のニーズ変化等考えると永代供養墓の必要性と今後の重要性をつくづく感じます。

しかし、たとえ世の中の変遷によりご供養の形が変わったとしても、私は、お檀家様とお寺がいつしよになり、個人個人のご先祖様・仏様を敬い、家の繁栄を願うことに変わりはないと思います。

東陽寺にはお檀家様と共に歩んだ四百年の重みがあり、それが東陽寺の歴史です。

合掌



永代供養釈迦堂に台座するお釈迦様

東陽寺を守る仏様——如意輪観音 (平成十九年十八号)

東陽寺シリーズとして東陽寺をお守りする仏様について数回にわたりご紹介していますが、今回は第四回目として平成五年に建立した本堂正面右手に安置されている如意輪観音像についてです。この如意輪観音像については、すでに平成十四年施食会で私が法話した時、クイズで色々ご紹介しましたが、もう一度クイズを思い出し、今回の紹介に換えさせていただきます。

第一問 如意輪観音様の頭(髪型)の形はどれですか。
 ① いぼいぼ頭(らぼつ) ② 坊主頭 ③ 長い髪頭

第二問 如意輪観音様の額の中央にあるものは何ですか。
 ① ほくろ ② 白い毛 ③ イボ

第三問 如意輪観音様の顔はいくつありますか。
 ① 一つ ② 二つ ③ 三つ以上

第四問 如意輪観音様の足の組み方はどのようですか。

① 正座 ② 両足組み坐禅 ③ 片足膝立て ④ 直立
 第五問 如意輪観音様の手の数はいくつですか。

① 二本 ② 四本 ③ 六本 ④ 七本以上

第六問 手には何を持っているか。次ぎの中から持っているものには○、持っていないものには×をつけなさい。

- ① 剣 ② 数珠 ③ 焼香 ④ 経本 ⑤ 法輪 ⑥ つぼ
- ⑦ 宝珠 ⑧ 蓮華の花 ⑨ 合掌 ⑩ 地面を指さす
- ⑪ 頬に手を当てる 以上が問題です。

もう一度同じ問題を解いた人、初めて問題を解いた人、回答は最後のところに載っています。全部出来ましたか。ここで少しクイズの補足説明をすると、如意輪観音様は如来様と同じに悟りを開きました。

しかし、如意輪観音様は如来の位に上がらず、世の中で慈悲行を実践し、衆生を救う菩薩様として庶民に信仰されました。手が六本あるのも、これは人が死ぬと六つの世界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天国の六道)にいくと考えられ、この六道に苦しんでいる人々を救う為に六本の手があると云われます。

如意輪観音様の如意は、西遊記の孫悟空が如意棒を持って思うままに伸び縮みする棒と同じ意味で、意のまま宝珠(打ち出の小槌)や法輪(福德智慧をうみだす、武器)をもって人々の願いをかなえてくれる観音様と言う事で如意輪と名がついたのです。

その他の特徴を言えば、菩薩様である髪は長髪で宝冠を被り、頬に手を当て、足は右片足膝立て(輪王座)のポーズをしています。

東陽寺の如意輪観音様はこの他にもう一体あります。それは外の水屋の左脇に石の如意輪観音様で、本堂の如意輪観音様と

違い、手が二本しかありません。どうぞお墓参りの折には二つの如意輪観音様もお参りしてください。

先の問題の答え、

第一問 ③ 第二問 ② 第三問 ①

第四問 ③ 第五問 ③

第六問 ① x ② 〇 ③ x ④ x ⑤ 〇 ⑥ x ⑦ 〇

⑧ 〇 ⑨ x ⑩ 〇 ⑪ 〇



如意輪観音様 大佛師 松本明慶 作

東陽寺を守る仏様―夢違観音 (平成二十年十九号)

東陽寺シリーズして東陽寺をお守りする仏様をご紹介します。前回お話しした如意輪観音様と同じ観音様で夢違観音様について今回お話しします。

「夢違」の読み方は、「ゆめたがい」と「ゆめちがえ」の二通りの読み方があり、この観音様像に祈れば悪夢を見ても吉夢に変えると伝えられ、この名が付いたそうです。

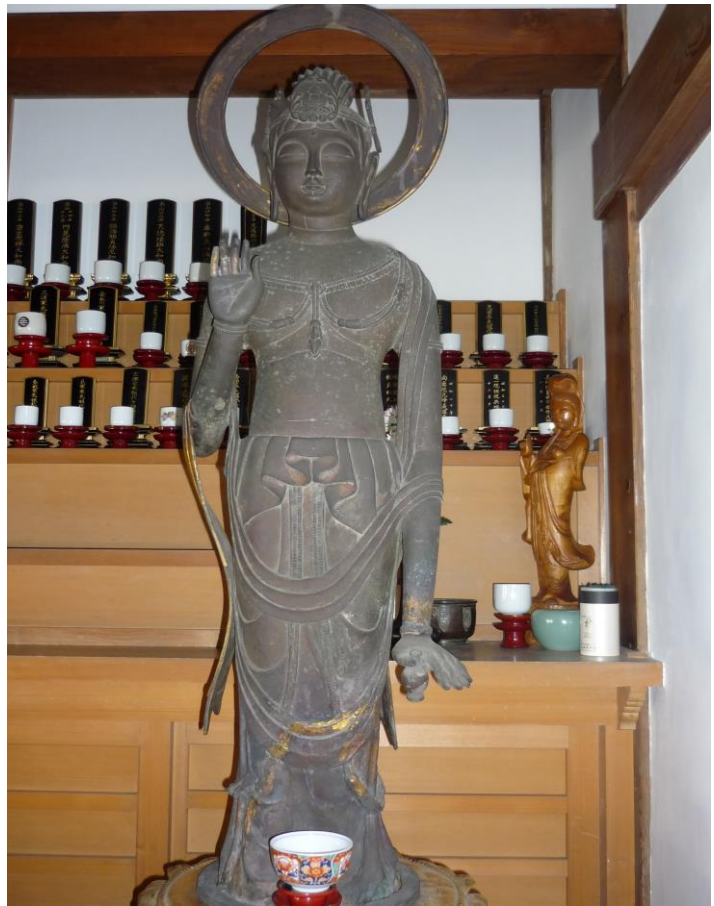
この東陽寺夢違観音様は、青銅で鑄造された立像です。手の組み方は右手を施無畏印と言って五本の指を伸ばし手のひらを前に向け、畏怖の心を取り除く姿勢をとっています。また左手には水壺（葉壺）を持っています。

頭上ただく宝冠は、観音様は三種類あり、頭部全体を覆う場合と正面のみの冠の場合と、正面と両側に分けて作られる場合があります。東陽寺夢違観音様の宝冠は、三面頭飾といい正面と両側に分けて作られるものです。三面頭飾は白鳳時代から天平時代までに流行したものです。また、宝冠の絵柄にも三つの特色があります。化仏（阿弥陀様の化身として阿弥陀仏を刻んだもの）が無い花模様のもと馬頭があるものと、阿弥陀仏の化仏があるものとがあります。東陽寺夢違観音様の宝冠模様は化仏のあるものです。

飾り類は豊かな起伏を持った胸に胸飾りを、腰から下に紐状の瓔珞（よららく・金・銀・珠寶・真珠を紐で連ねた装身具）をつけ、腕とひじに釧（せん・装飾飾り）をはめています。

腰に巻いた裳は短く両足が見えますが、東陽寺夢違観音は両足の部分分が壊れて、後にお檀家様である黒川吉次郎様の寄進により足の部分を修復し、立派な台座を取り付けられました。

この東陽寺夢違観音様と見た目も、造りも同一で、国宝に指定されているのが、奈良の法隆寺にある観音菩薩像夢違観音です。実際の法隆寺観音菩薩像夢違観音を見ていないのでよくわかりませんが、仏像の本の写真で見ると、瓜二つに似ています。私の祖父卍禅子和尚も当時、夢違観音様の製造年月やその価値等を古美術鑑定士に調査依頼したそうですが詳しいことはわかりません。合掌



夢 違 観 音 様

東陽寺を守る仏様——大権修理菩薩・達磨大師（平成二十年二十号）

東陽寺シリーズとして東陽寺をお守りする仏様について数回にわたりご紹介していますが、今回は第六回目として大権修理菩薩様と達磨大師についてお話しします。

大権修理菩薩は須彌壇の後方、向かって右側の壇に安置してある木像で、椅子にすわり、白い髭をたくわえ、右手を額にあげて遠望の姿

をしています。

この菩薩のエピソードは、曹洞宗開山である道元禪師が如浄禪師より法を受け継ぎ、中国から日本へ帰るとき、菩薩が後から追ってこられ、「私は招宝七郎大権修理です。正法護持のために参ったとあります。」そこで禪師が同行を許すと、三寸ばかりの白蛇となり禪師の応量器（食事の器）に身を収めて渡来したと言われています。それ以後、大権修理菩薩はお寺の土地神として境内浄域の守護神であり、伽藍建物の守護神でもあり、また仏法の守護神でもあるのです。そこで毎朝お寺ではお勤めで仏殿諷経というお経を読み、大権修理菩薩をお守りしています。

次に達磨大師についてです。達磨大師は須彌壇の後方、大権修理菩薩と反対の左側の壇に安置してある木像で、碧眼で法衣を頭上からかぶり、椅子にすわり坐禅をしています。

達磨大師はインドより三年掛けて中国にわたり「面壁九年」黙々と坐禅を通じお釈迦様及びお釈迦様より以前に開眼した過去佛の教え（仏教）を中国に根付けた祖師様です。

初めて中国にわたった時、武帝と達磨大師が出会い問答した有名な話を紹介します。

「達磨廓然」

武帝は即位して以来、仏に帰依し寺を造る等善行を行った。この功德は何かと達磨に問う。達磨「なにも功德はない。」そこで武帝は本物の功德は何かと問う。達磨答えて曰く「あらゆるものの本質は空で、世に言う功德と違う。」それでも武帝はわからず達磨に聞く「仏様の教えのギリギリのところは何か？」 達磨「はつきり言つてギリギリなんぞありません。」 武帝曰く「それを伝えるおまえは一体誰だ。」 達磨「知らない。」と そのまま去る。実に「知らない」と言う一言に「是が私です。」「これが真理です。」と強い意志が、武帝にはわかりませんでした。

この達磨大師も大権修理菩薩と同じようにお寺の毎朝のお勤めの祖堂諷経という中でインド・中国・日本と脈々と仏の教えを守り伝えた歴代祖師様のへ感謝の思いで一人一人お名前を読みあげる中にいらつしやいます。特に東陽寺の達磨大師は、中国の若い無名の仏師の作でや



達磨大師像



大権修理菩薩像

や険しい顔をした若い達磨さんといった感じですが。この達磨様は自分
 にとって毎朝お経を読む励みとなっています。一度本堂をお参りの折、
 須彌壇両脇の大権修理菩薩様と達磨大師をお参りしてください。合掌



文化財発掘調査



地鎮祭

平成二十年度客殿構築の様子（平成二十一年二十一号）
 客殿構築の様子を写真にてご紹介します。



岐阜 亀山建設 材木検査



基礎コンクリー打ち検査



棟上式 槌打ちの儀 (平成二十年八月三十一日)



棟上げ工事



棟上式 曳綱の儀



客殿再構築完成（平成二十一年四月五日）

大黒	長野 次男	関客殿委員 小林副住職	横井 住職	長野総代 長野平野老師	藤田総代 黒川総代	諸岡客殿委員 河西本宮老師	佐藤（敬称略） 内田老師
----	----------	----------------	----------	----------------	--------------	------------------	-----------------

東陽寺本堂からの発見

(平成二十二年二十二号)

東陽寺シリーズ第十六弾として、今回本堂の改修と瓦葺き替え工事を行い、その時に本堂から貴重な記録を発見できましたので、ご紹介いたします。

一つは、本堂基礎のコンクリートに石が埋め込まれて有りその石に本堂の再建の当時の記録がありました。石の場所は本堂の東、客殿から本堂に入る渡り廊下の下の基礎の所です。

萬年山東陽寺大正十二年九月大震災火災為浅草区

高原町依伊興村狭間移轉

昭和五年七月吉祥日 復興本堂建立

現住廿四世 圓晃隆満

檀家総代 木下藤二郎

同 長野文造

同 中村つね

監督人 伊藤新太郎

棟梁 鯨井文蔵

石工統領 元井義次郎

鳶頭 田中辰五郎

大工 頭人 鯨井伊助

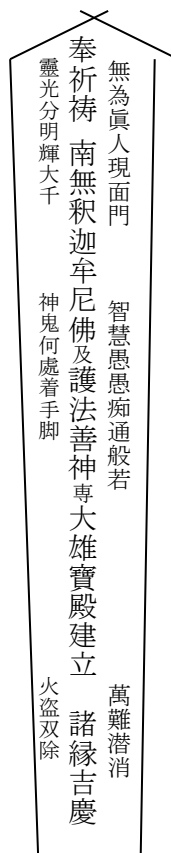
石工 頭人 木原浅次郎

当寺檀信徒 一同

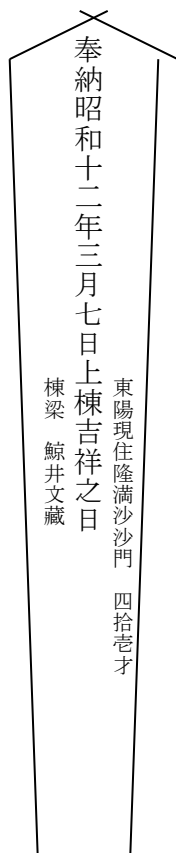
と彫られています。

二つは、屋根裏に棟板が発見されました。この棟板は、棟梁が建てた本堂を後世に伝える貴重な資料です。棟板の大きさは、横十七cm・高さ百四cm 有り、私の祖父 当山二十四世円晃隆満大和尚四十一歳の時に書いたものと推測されます。

表



裏



と書かれていました。

平成二十二年度本堂改修工事の様子（平成二十二年二十三号）
瓦の撤去 改修開始 風景



軒下 下がり補強



本堂の軒下 腐食状況



修復完成した本堂 風景



江戸時代の東陽寺古地図

(平成二十二年二十四号)

東陽寺シリーズ第十七弾として、江戸時代の東陽寺を地図で探索したいと思います。

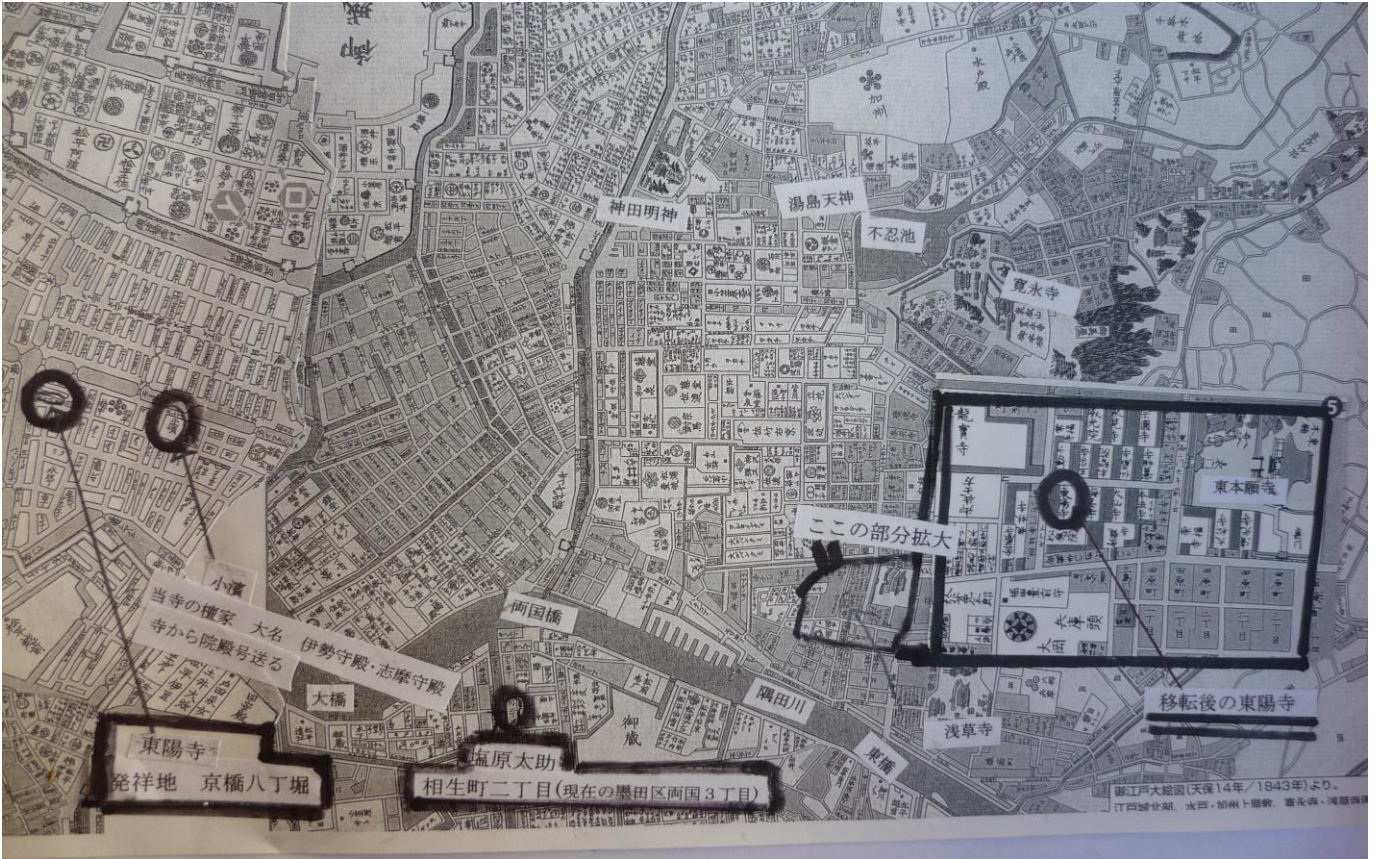
大江戸鳥瞰 ちやうかん 文化六年(1809年) 鋏形紹真の地図 くわがたつぐさね
御江戸大絵図天保十四年(1843年)の地図で
それぞれ東陽寺の位置を確認してください。

- ① 東陽寺発祥地 慶長十六年(1611年) 京橋八丁堀寺町
 - ② 替地移転 寛永十二年(1635年) 浅草八軒寺町
- (一言メモ)

当寺に関連が深い大名で檀家様の小濱氏および塩原太助の所在地も地図で確認してください。



くわがたつぐさね
鋤形紹真の地図



御江戸大絵図天保十四年（1843年）の地図